

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 25 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370530

研究課題名(和文)「朝鮮資料」の辞書類からみた中・近世語の諸相

研究課題名(英文) A Comparative Approach to the Reconstruction of Medieval and Late Medieval Japanese and Korean in the Korean Materials' dictionaries

研究代表者

朴 真完 (PARK, Jinwan)

京都産業大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90441203

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：「朝鮮資料」辞書類の本文中には日本語をハングルあるいは朝鮮字音で記した箇所が多いため、朝鮮語との対照分析を通して中世から近世にかけての語彙の変遷について記述した。また新資料の発掘にも努め、日本語と朝鮮語の研究資料に資するものとして、多言語辞書『三学訳語』における日本語部分の語彙説明、日本語兼朝鮮語学習書『対談秘密手鑑』、朝鮮語稽古通詞の作文練習帳『復文録』などを学界に公表し、その内容を細かく分析した。

研究成果の概要(英文)：Based on the Korean Materials' dictionaries, in which there were many Japanese words written in Hangeul or Sino-Korean characters, this research investigates changes in the vocabulary of Japanese from the 18th century to the 19th century in a comparative analysis. Additionally, a collection of materials are analyzed which contribute to explaining the history of the Japanese language, including a Japanese -language dictionary Sam-hak-yeok-eo (三学訳語), a textbook for learning two languages simultaneously (Japanese and Korean) taidan-himitsu-tekagami (対談秘密手鑑), a compilation of composition exercises for a Korean interpreter (a Japanese) Huku-bun-roku (復文録).

研究分野：日本語史、朝鮮語史、対照言語学

キーワード：日本語史 朝鮮語史 対照言語学 中世日本語 近世日本語 朝鮮資料 日本語辞書

1. 研究開始当初の背景

(1) 「朝鮮資料」とは日本語史研究に利用される資料中「朝鮮」に関わるものを指す。既存研究で扱われた主な文献として、17世紀から18世紀にわたって朝鮮の司訳院(現在の外国語大学)で編纂された日本語学習書類のうち、辞書類に属するものには『方言集釈』(1778年成立)『倭語類解』(1780年代)などがある。以上の資料は原文(日本語)と対訳文(朝鮮語)を配列するという対訳形式で記されている。

(2) 従来、集中的に論じられた「朝鮮資料」の教科書類は17世紀以降刊行されたため、それ以前の日本語を観察できない欠点がある。しかし教科書以外の膨大な文献にも注目し、辞書類の草案まで考察の対象にすると、15世紀から19世紀までの日本語語彙についても記述可能となる。

さらに、その分析結果を『節用集』などの日本国内資料、『日葡辞書』『下学集』をはじめとするキリシタン資料、中国資料の『日本寄語』『日本一鑑』所収の語彙と比べることによって、中・近世日本語に対する相互認識の違いについても検討することができる。

(3) 「朝鮮資料」の辞書類は、日本と韓国各地に分散したままであり、そのうえ影印・翻刻も殆どされていないために、全貌をうかがうことは困難を極める。文献に接することが容易でないという状況が、「朝鮮資料」の認知度を低くし、そのことがさらに研究を遅らせるという悪循環が、研究の進展を阻害している。

(4) 研究対象として、まず「朝鮮資料」辞書類の中でも後代に刊行される辞書のモデルとなる『倭語類解』(全2巻)は、1785~88年朝鮮「司訳院」刊行の日本語辞書である。見出し語の数は約3400語、各項目にはハングル表記で意味や発音に関する説明がなされているため、当時の語彙の諸相を知るための絶好の資料となる。

本書の編者は洪舜明とされ、日本語の記述に関しては雨森芳洲(1668~1755)の協力を得て完成したとされる。この他、『倭語類解』の後を継ぐ『方言集釈』と『三学訳語』に関しても幾つかの研究が蓄積されているが、辞書類の研究における一層の進展のためには、新資料の発掘が必須となる。

2. 研究の目的

(1) 『倭語類解』『方言集釈』の他、「朝鮮資料」辞書類としてあまり知られていない文献を発掘し、その書誌的概要と言語資料としての価値を探り、日本語の歴史的な研究に役に立つ、中・近世語についての新たな解釈

を試みる。

(2) 現在まで所在が確認された辞書類の中には、異本の存在が報告されているものがある。『倭語類解』の場合、イギリス・マンチェスター大学付属のジョンライランズ図書館本、韓国国立中央図書館本、駒沢大学濯足文庫本、東京大学文学部図書室小倉文庫本の四種が確認される。

異本が存在する場合、また文献研究が不十分である場合は、考証作業を通じて文献批評まで進む。その後、「朝鮮資料」における中・近世日本語のデータベースを作成し、そのデータベースを基に、朝鮮語との比較・対照研究を通じて、語構成、語彙の位相などの諸問題を詳細に検討してゆく。

(3) いまだ十分研究されていない辞書類には、(韓国)奎章閣所蔵の『三学訳語』、京都大学文学研究科図書館所蔵の『対談秘密手鑑』『和語類解』『類合』『対談秘密手鑑』『朝鮮語学習書』(仮称)などがある。また今回の調査の結果、鹿児島県美山にも苗代川本『対談秘密手鑑』(旧、大武進氏所蔵)が所蔵されていたため、その書誌的概要と言語資料としての価値を調べ、京大本との相違点を学界に報告する。これらの資料以外にも日本国内外に広範囲で分布されている辞書類を幅広く収集する。

3. 研究の方法

(1) 「朝鮮資料」辞書類の文献研究を行い、最初は「朝鮮資料」辞書類の中、日本語史研究に資するあらゆる文献を収集することに専念する。底本の書誌、新たに所在が確認された資料などの確認のため、現地調査を実施する。その後、原典研究に進み、異本間の対照研究を行う。

(2) 「朝鮮資料」辞書類における文献間の異同について照合作業を実施する。また漢字語と固有語は別項目とし、「朝鮮資料」の辞書類における表記システム、つまり仮名・ハングル表記の対応表を作成する。朝鮮語文字のハングルを用いてどのように中・近世日本語を転写(transcription)したかという表記の問題を解決してからは、比較・対照研究を通じて中・近世語の語彙体系を分析していく。

(3) 「朝鮮資料」の辞書類、例えば『倭語類解』(全2巻)の見出し語にはハングル表記で意味や発音に関する説明がなされている。このような対訳辞書を通して一つの言語の歴史を探るためには、日本語と朝鮮語の対照という方法が有効であろう。例えば、分析の道具が朝鮮語で、記述の対象が日本語である場合、複合語・派生語などの語構成をはじめとする語彙体系の分析が必須となる。

(4) 本研究では、「朝鮮資料」における言語変遷、特に、語彙の意味変化の過程に注目する。具体的には、個別の単語において どういう意味変化が生じているのか、改訂の段階で単語の入れ替えが行われた場合は どういう方針で行われているのか、またその際、どういう意識が介入しているのか、という3点に注目する。「朝鮮資料」辞書類の改訂過程を明らかにすることによって、なぜ異本間では言語差が見られるのか、また日本語史の中で「朝鮮資料」辞書類がどういう位置を占めているのか、という問題も解決されると考えている。

4. 研究成果

(1) 「朝鮮資料」の辞書類のうち、朝鮮時代李義鳳によって編集された多言語辞書『三学訳語』(1789)所収日本語について研究を行い、本書の見出し語2,678語の中で発音説明を有する語彙は1,755語に及ぶこと、また本書の日本語は『倭語類解』を底本にして、本文の相当部分を参照しながらも、部門立て及び発音説明において相異なる記述が見られることを確認した。

『三学訳語』の日本語記述には、朝鮮通信使が書いた日本見聞録が参照され、中国文献『日本寄語』の内容も引用された。しかし、編者李義鳳は引用書の内容に全面的に依拠せず、日本・日本語に関する総体的な記述を目指して、自分の分析による独自の記述を試みたということも確認できる。

(2) 「朝鮮資料」の辞書類のうち、朝鮮通事の候補者朴為良によって編纂された『対談秘密手鑑』(1849年、写本、一冊)を中心に書誌学的考察及び内容分析を行った。まず文献調査の結果、本書には二種の異本、京都大学本と大武進氏旧蔵本とが存在することを確認した。

異本『対談秘密手鑑』のデータベースを作成し、先行文献との関連性を調べた結果、『対談秘密手鑑』は、苗代川に伝わる朝鮮語学習書の形式面・内容面の両方から影響を受けたことが確認できた。本文の体制は基本的に、見出し語を上段に短文を含む語彙説明を下段に配置するという方式を取っており、これは苗代川本『交隣須知』(京都大学所蔵)の方式を踏襲したものである。また本文最後の「言語」条(頁73~92)においては、上段に見出し語、下段に訓読みと朝鮮語訳を配置する形式を取っている。これは苗代川本『和語類解』(京都大学所蔵)の形式と概ね一致している。

しかし本文中には「語傍」条が設けられ、日本語の助詞・助動詞が集中的に収録されている。この点は他の朝鮮語学習書には例を見ない本書だけの特徴である。さらに訓読み語、

日本国字や当て字が説明されている点から見ると、本書は、実際の活用頻度において、主に日本語学習用として使われた可能性が高い。その説明は文法・語彙はもちろん、日朝における漢字字形の違いまで及んでいるが、このような態度から見ると、『対談秘密手鑑』は現在まで報告されている苗代川本朝鮮語学習書類とは性格を異にするということが指摘できよう。

以上の事実は本書の編纂目的とも関連するが、苗代川朝鮮通事の業務の一つとして漂流民との「対談」内容を薩摩藩に報告する義務があったこと、本書の成立以前にはその活動をサポートするための工具書が存在しなかったことを勘案すれば、『対談秘密手鑑』のような朝鮮語兼日本語学習書が必要だったということが十分理解できる。

(3) 草梁館語学所(1873.10~1880.4)の語学生中村庄次郎が作成した『復文録』148条の記事は、語学所で実施した復文(retranslation)の練習とその結果物の記録であり、本書を通して試験問題の内容及び評価方式はもちろん、誤答に対する添削内容まで確認できる。記事の中には試験簿と日記簿を基に作成されたものが存在するため、語学所における教育方式と内容の一端を知ることができる。

また一部の記事には、外交交渉に当たるための情報として、対馬で編纂された朝鮮語学習書(『全一道人』『交隣須知』『隣語大方』『惜陰談』)や朝鮮情報書(『御尋朝鮮覺書』『北京路程記』)から採録された内容が見られ、文学作品や歴史書から抜粋された内容も含まれている。これに対して典拠書を特定できない記事も存在するが、その場合は概ね朝鮮側の通訳官との対話から直接入手した情報と推定される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

朴 真完「草梁館語学所の朝鮮語教育方式の研究『復文録』の分析を通じて」『韓国語教育』26-2、2015、pp. 168-196(査読あり)

朴 真完「苗代川本『対談秘密手鑑』の研究 薩摩藩朝鮮通事の言語学習をめぐって」『韓国語学』54、2015、pp. 97-124(査読あり)

朴 真完「『三学訳語』の日本語に関する考察-引用書との関係を中心に」『京都産業大学日本文化研究所紀要』19、2014、pp.84-111(査読あり)

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009808918>

〔学会発表〕(計5件)

朴 真完「日本における韓国語専攻の教科課程に関する比較研究」、国際韓国語教育学会第25次国際学術会議、2015年8月9日、慶熙大学校(韓国)

朴 真完「『復文録』の原文確保方法についての考察」、国際訳学書学会第7次国際学術会議、2015年8月2日、成均館大学(韓国)

朴 真完「草梁館語学所『復文録』の成立過程 引用書との関係を中心に」、国語国文学学会2015国際学術大会、2015年5月30日、高麗大学(韓国)

朴 真完「京都産業大学における韓国語教育の現状と課題」、第3次韓国語学会国際学術大会、2014年7月4日、高雄大学(台湾)

朴 真完「19世紀末日本人による朝鮮語教育方式の研究 草梁館語学所『復文録』の分析を通して」、第5回国際韓国語教育学会国際学術大会、2013年8月10日、高麗大学(韓国)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

朴 真完 (PARK, Jinwan)

京都産業大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90441203